

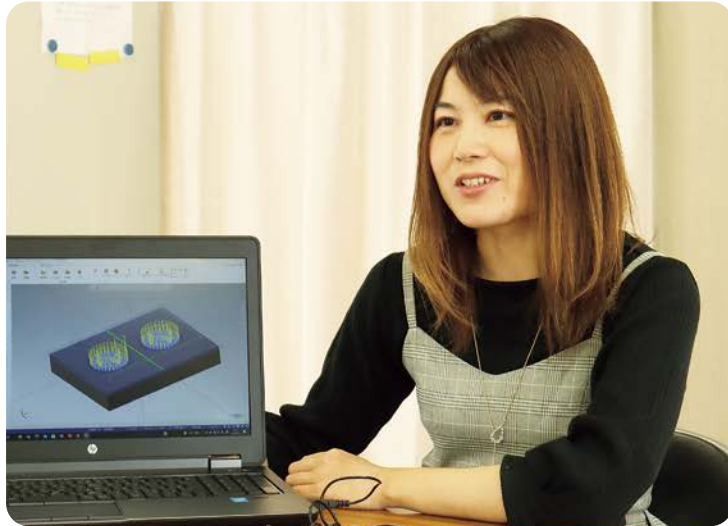
10月のクローズアップは個人と団体の2本立てで紹介します

## 日本唯一の「削って作る鋳型」で日本鋳造工学会技術賞受賞

## 株式会社小西鋳造 開発担当

## 小西 英理子 さん (こにし・えりこ 30歳)

「最先端の技術を使い、鋳造業界で働く女性のロールモデルになれば」と市内でステンレス製品などの特殊鋼鋳物を製造する株式会社小西鋳造の小西英理子さん。小西さ



「これまで一般的なのが鋳型です。これと同じ形状の木型を砂に転写し型を取る製法でした。今回新たに開発した技術は、パソコン上で作成した鋳型の3D

データに基づき切削機をプログラム制御し砂のブロックから鋳型を削り出すもの。新技術では、木型が不要になったことに加え、より複雑な形状の製品も製造できるようになりました。今回の技術開発の背景には、災害を想定した製品管理のデータ化や、従業員の労働環境を改善したいという思いがありました。新製法では、これまで手作業だった工程を機械化し、危険を伴う重労働を軽減。木型の製作・管理業務を減らすことで納期の短縮と低コスト化も実現しました。小西さんは「開発には創業以来のノウハウが大いに活かされ、技術革新に前向きな社風も後押しとなりました」と語ります。

現在では切削鋳型用のデータ作成など、デジタル分野から鋳造業務を支える小西さんですが、今回の技術開発に携わ

るまでプログラミングの経験はありませんでした。「苦労も多くありましたが、粘り強く取り組むことで実用化にこぎ着けることができました。鋳造業は重労働が多く、女性就業者は少ないのが現状です。工程のデジタル化によって女性が活躍できる場を増やしたい」と意欲的です。



新技術を用いて製作した複雑形状の試作品

今後は、新技術を用いた製造の割合を増やしつつ、砂型の切削精度を上げるための専用機材の開発などを行い、製品の更なる品質向上を目指します。

業務のデジタル化を進め、誰もが働きやすい環境を作りたい

## 岩手県勢28年ぶりの快挙! 簿記の甲子園(団体の部)で9位入賞

### 岩手県立宮古商工高等学校3年

大城輝<sup>おおしろ あきら</sup>さん 鈴木愛梨沙<sup>すずき ありさ</sup>さん 畠山大樹<sup>はたけやま ひろき</sup>さん

宮古商工高校3年の大城輝さん、鈴木愛梨沙さん、畠山大樹さんは、6月19日に開催された第37回岩手県高等学校簿記競技大会岩手県大会を宮古商工高校として4年ぶりに制し、7月18日に行われた全国大会(団体の部)で、県勢28年ぶりに9位入賞を果たしました。

競技は、それぞれが同じ問題を解き、その合計点数がそのまま得点になるというもの。大会に向けて4月から取り組み始めましたが、最初は制限時間45分の問題を解くために2〜3時間かかっていたという3人。部活や、学校の課題もあり時間に制約がある中、過去問題を分析し自分なりの学習方法を見つけながら、着実に点数を伸ばしてきました。

問題の傾向が変わり、県大会でも苦戦を強いられました。指導した松浦昭彦先生は「彼らは目標に対してのモチベーションが高く、毎日の課題にも積極的に取り組んでいた。やるからには勝て」と常に指導してきたが、期待に応えて見事な結果を出してくれた。約25年間指導してきた中で、1番成果を出した生徒たちだ」と誇らしげに話した。畠山さんは「入賞という結果を知った時はとにかく驚いた。自分が足を引っ張ったのではないかと不安だったが、時間が経つにつれ実感が湧いてきた」と笑顔を見せます。個人の部でも、出場した232人中19位と大健闘し、佳良賞を獲得した鈴木さんは「手応えはあったが、結果を聞いた時は信じられなかった。過去問題を解きながら、自分の弱点をしっかりと克服できたことが結果につながった」と話します。3人は「大会までの間、ひたすら過去の問題を解き続けた。平日は毎日3時間以上、土・日は学校に来て朝から夕方まで問題に向き合ってた」と振り返り、大城さんは「これだけの努力をしたのは人生で初めて。身に付いた忍耐力や集中力をこれからこの人生で活かしたい」と意気込みを語ります。

「やるからには勝つ。日々の努力が実を結ぶ」

松浦昭彦先生、鈴木愛梨沙さん、大城輝さん、畠山大樹さん

今後は、進学を目指す3人。彼らは、それぞれの夢に向かって、今回得た経験と自信を胸に新たな一歩を歩み始めます。



左から、宮古商工高校商業研究同好会顧問 松浦昭彦先生、鈴木愛梨沙さん、大城輝さん、畠山大樹さん